

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H01836

研究課題名(和文) 転換期としての「昭和50年代」と大衆メディア文化の変容

研究課題名(英文) "Showa 50's" as a turning point and transformation of mass media culture

研究代表者

福間 良明 (FUKUMA, Yoshiaki)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70380144

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「昭和50年代」(1970年代半ば～80年代半ば)の大衆メディア文化を検討し、いかに「政治の季節」の文化(「学生運動文化」「教養主義」「戦争の記憶」)が残存・変容しながら「バブル文化」に至ったのか、その転換の過程について検討を行い、「政治の季節」から「バブル文化」に至る文化変容を歴史社会的に考察した。具体的には、同時期の映画、テレビドラマ、雑誌、アニメ、マンガ、歴史小説等を扱いながら、「政治の季節」「戦争の記憶」「教養主義」がいかなる偏差を帯びながらメディア文化に投影されていたのか、あるいは「戦後」の価値への嫌悪がどう織り込まれていたのかについて、分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「政治の季節」(1960年頃～70年前後)の政治運動や学生運動については多くの研究蓄積があり、1980年代論やバブル文化論も、近年、隆盛を見せている。だが、「政治の季節」から「バブル文化」に行き着くまでに、どのような文化や社会の変容が見られたのか。その過程で、先行する時代をいかに引き継ぎ、断絶していたのか。この転換の過程については、これまで整理がなされなかった。本研究は、「昭和50年代」という転換期のメディア文化に着目し、「政治の季節」から「バブル文化」に至る文化変容を検証した。

研究成果の概要(英文)：This study examines the mass media culture of the "1950s" (mid-1970s to mid-1980s) and how the culture of the "political season" ("student movement culture", "admire for liberal arts", "memory of war"). We examined the process of the transformation and examined the cultural transformation from the "political season" to the "bubble culture" from a historical sociological point of view. Specifically, while dealing with movies, TV dramas, magazines, anime, manga, historical novels, etc. of the same period, "political season", "memory of war", and "admire for liberal arts" are projected onto media culture with any deviation. We analyzed whether it was done or how the aversion to "post-war" values was factored in.

研究分野：歴史社会学

キーワード：昭和50年代 教養主義 戦争の記憶 政治の季節

1. 研究開始当初の背景

戦後もすでに七〇年以上が経過し、それは「歴史」の対象となりつつある。二〇〇〇年代以降、占領期研究やサークル文化史研究など、一九五〇年代までの研究が進展した。二〇一〇年前後には六〇年安保闘争から五〇年という節目もあり、一九六〇年前後の社会運動史について多くの著作が出された。また、それに牽引されるように、六〇年代後半の学生運動やベトナム反戦運動に関する証言や研究も多く世に出された。

その一方で、一九八〇年代の研究も少なからず見られ、バブル経済期前後の消費文化やオタク文化について、多くの研究が蓄積されつつある。バブル期と言えば、三五年ほどをさかのぼるに過ぎないが、すでに、こうした時代をある種の「歴史」として捉え返す動きが進みつつある。

だが、六〇年代（およびそれ以前）や八〇年代についての議論が積み重ねられつつある一方、そのはざまの時代については、焦点が当てられることが少ない。六〇年代であれば「政治の季節」、八〇年代であれば「バブルの時代」というイメージがあるのに対し、その間の時代イメージは漠としており、それを一言で形容する語は見つからない。そのためか、「政治の季節」と「バブルの時代」のはざまの時期の文化史研究は、あまり進んでいない。それはすなわち、「政治の季節」から「バブルの時代」への移行プロセスが十全に検証されてこなかったことを意味する。

むしろ、政治史や経済史の面では、これらの時代に関する研究の蓄積は厚い。道路建設や原発誘致による田中角栄政権期の地方開発（日本列島改造論）、三木・福田・大平内閣期の自民党派閥抗争とその機能、中曽根政権期の新自由主義路線については、すでに政治史の分野でまとまった研究が多く出されている。経済史の分野では、オイルショックやニクソン・ショックの日本経済への影響、プラザ合意からバブル経済に至るプロセス、そうしたなかでの「日本的経営」の称揚と労働組合の弱体化などが多く論じられている。だが、これら政治史・経済史的な動向も絡みながら、メディア史・文化史は「政治の季節」から「バブルの時代」にかけてどのように変容したのか。この点については、これまであまり着目されてこなかった。

2. 研究の目的

本研究はこうした問題意識に立ちながら、おもに一九七〇年代後半から八〇年代前半、つまり「昭和五〇年代」のメディア文化史を多角的に考察するものである。「一九七〇年代」ではなく「昭和五〇年代」に着目するのは、むしろ、理由があつてのことである。

「政治の季節」は決して東大闘争（一九六九年一月）やあさま山荘事件（一九七二年二月）で終焉したわけではなく、その余波はさまざまに持続していた。それはすなわち、「政治の季節」の経験者が、その後もさまざまな局面でその文化を持続させていたことを物語る。「バブル文化」と言われるような消費文化・趣味文化にしても、一九八〇年代後半のバブル経済とともに成立したわけではない。すでにそれ以前から進行していた趣味・関心の細分化や「政治」への嫌悪は、バブル期の文化と決して無関係ではなかった。

戦後史を考えるうえで、「政治の季節」が終焉した一九七〇年前後は、たしかに一つの画期をなす時期ではあった。だが、その余韻はすぐに消え去ったわけではない。学生運動文化のなかで青春期を送った世代は、その後、メディアや教育の第一線で活動している。教養主義は大学紛争のなかで衰退したが、一九八〇年代には歴史雑誌ブームや現代思想ブームなど、「知的なもの」を希求する動きも少なからず見られた。

だとすれば、「政治の季節」の余韻（もしくはその反発）は、その後、どの局面でどのように残存したのか。また、別の局面では、いかに、そしてなぜ消失したのか。そこからどのような文化変容・メディア変容を経て、「バブル文化」や「一九八〇年代」に至ったのか。こうしたグラデーションを検討するためには、「政治の季節」の余韻がかるうじて残っているであろう一九七〇年代半ばから、「バブル」の前史ともいべき一九八〇年代前半までの時期、すなわち「昭和五〇年代」への着目が不可欠である。「一九七〇年代」「一九八〇年代」という区分とは異なり、「昭和五〇年代」に注目することで、「政治の季節」の終焉（一九七〇年前後）から「バブル文化」（一九八〇年代後半）に至る文化変容プロセスやその温度差（グラデーション）を析出することができるだろう。

さらに言えば、「昭和」という和暦表記には、「戦争の記憶」もつきまとう。日中戦争・太平洋戦争が行われたのは「昭和一二年」から「昭和二〇年」の八年間（満州事変を起点にするのであれば、「昭和六年」からの一四年間）であり、六三年間におよぶ昭和期のごく一部に過ぎない。だが、裕仁天皇が在位した「昭和」という時代区分は、全国民ひいてはアジア諸国を巻き込んだその「戦争」の問題を不可避的に想起させる。たとえ戦後においても、再軍備問題、六〇年安保闘争、ベトナム反戦運動、靖国神社国家護持問題など、「先の戦争」はつねに論争の起点となっていた。そのことを考えれば、「一九七〇年代」「一九八〇年代」といった中立的・客観的な（イメージを伴いやすい）年代表記に比べて、「昭和五〇年代」という語は、戦争あるいは戦後をめぐる屈折のようなものをも、不可避的に思い起こさせる。

折しもこの時代は、戦中派世代が五〇代半ばに達し、定年を迎えつつある時期だった。そこに「政治の季節」の終焉や消費文化の進行が折り重なるなか、戦争体験や戦後の価値観に対して、

社会的にいかなるこだわりや違和感が見られたのか。これらを問おうとするのであれば、「一九七〇年代」や「一九八〇年代」ではなく、「昭和五〇年代」への着目こそが必要となる。

3. 研究の方法

分析対象と分析視角、担当は以下の通り。

- ・戦中派のイメージとテレビドラマ（担当：井上義和）
- ・ドラマに映る家族イメージと戦後民主主義観（担当：山本昭宏）
- ・映画におけるセクシャリティの位置づけと戦後民主主義批判（担当：日高勝之）
- ・在日コリアン向け論壇誌におけるアイデンティティの錯綜（担当：権学俊）
- ・青年海外協力隊とボランティアの欲望（担当：白戸健一郎）
- ・『二つの祖国』『山河燃ゆ』論争と日本人の境界（担当：松永智子）
- ・マイコン趣味における「情報革命の旗手」の自負（担当：前田至剛）
- ・スポーツ雑誌と「教養」への愛憎（担当：佐藤彰宣）
- ・昭和50年代の美容言説と身体のパフォーディズム（担当：谷本奈穂）
- ・劇画の時代の終焉（担当：森下達）
- ・昭和50年代のスポ根ドラマと教育観（担当：水出幸輝）
- ・修養小説の臨界と「ガンダム」（担当：野上元）
- ・冒険ものをめぐる「自分探し」と「メディアイベント」（担当：高井昌吏）
- ・大衆歴史ブームと教養主義の残滓（担当：福岡良明）

4. 研究成果

「昭和50年代」の社会状況のなかから、いかなるメディア文化が紡がれたのか。それを通して「政治の季節」から「バブルの時代」に至るプロセスの錯綜がどう浮かび上がるか。本研究は、さまざまな「昭和50年代」のメディア文化を検討しながら、これらの問いについて考察し、『昭和50年代論』（みずき書林、2022年刊行予定）にまとめた。具体的には「『戦後』への疑念」（第一部）、「ナショナリティのゆらぎ」（第二部）、「『趣味』の変質」（第三部）、「修養と教養の残影」（第四部）の四部で構成される。

以上の観点から「昭和50年代」を捉え直すことは、「キャッチアップ型近代」から「ポスト・キャッチアップ型近代」へ、「『戦後』が信じられていた時代」から「『戦後』が信じられなくなった時代」へ至るプロセスを、メディア文化史の観点から捉えることでもある。

むろん、それは単線的な変化をたどったわけではない。従来の戦後の規範をかなぐり捨てようとする動きも多く見られた一方、戦後の理念や戦争体験が後景化する状況への抗いも色濃く見られた。言うなれば、「戦後の終わりの始まり」と「終わらない戦後」への固執が複雑に絡まり合っていたのが、「昭和五〇年代」であった。それまでの「戦後」の理念に対する反感や共感は、大衆的なメディア文化のうえにどう表れていたのか。そこにはどのような可能性や限界があったのか。本研究はこれらについて考えるものである。

なお、これらの検討を行なううえでは、同時代の社会状況に目配りしている。「昭和50年代」において特徴的なのは、欧米の政治理念（デモクラシー）や科学技術、産業を基準とし、それに追いつこうとする「キャッチアップ型近代」が終焉し、戦後の新たなフェーズに入ったことである。

すでに、1960年代末の大学紛争において、「戦後民主主義」への疑念が噴出していった。自由と平等、国民権に根差した民主主義の理念は、アメリカに範をとる戦後日本において、広範に支持された。かつてA級戦犯容疑で逮捕され、強引な政治手法が目立った岸信介が、60年安保闘争において首相の座を追われたのは、その好例であった。そこには、現実のアメリカではなく、「理念としてのアメリカ」（から生み出された民主主義）への憧憬と共感があった。だが、60年代末にもなると、「戦後民主主義」は対米追従と管理社会化を生み出すものとして、若者たちの批判を浴びるようになった。戦後の「理想」とされてきたものの価値が低下するようになったのが、大学紛争期であった。

ただ、こうした動きへの支持も決して持続したわけではない。東大紛争における安田講堂攻防戦が鎮圧されると、大学紛争は全体的に下火になった。なかには、かえって過激化する動きも見られたが、赤軍派がよど号ハイジャック事件を起こし（1970年3月）また、連合赤軍メンバーがあさま山荘に人質をとって立て籠もったばかりか、内部で凄惨なリンチ殺人が繰り返されたことが明らかになると（あさま山荘事件、1972年2月）旧左翼や戦後民主主義を批判した新左翼は「過激派」とみなされ、急速に支持を失った。その意味で、「戦後民主主義」のみならず「戦後民主主義批判」への信用もが薄れていったのが、「昭和50年代」であった。

以上を念頭に置きながら、本共同研究では「昭和50年代」のメディア文化の諸相を浮き彫りにしている。

なお、これらの知見は、約40年後の現在を問うことにも接続するだろう。インターネットやSNSの普及により、人々は自らの趣味・関心を深化させることがより容易になった。だが、その一方で、テレビや新聞など、関心の外にある情報にも接するメディアは、総じて縁遠いものになりつつある。こうした状況をふまえて「昭和50年代」のメディア文化史を見直してみると、

趣味・消費の語りに今日とのいかなる近接性と相違を見ることができるのか。また、そこでの限界（や可能性）は現代にどうつながっているのか（いないのか）。「昭和 50 年代」は「戦後の終わりの始まり」と「終わらない戦後」が交錯する時代だった。これらが未分化だった時代のメディア文化を捉え返すことは、ともすれば自明視されがちな今日のメディア状況を考えることにつながるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計29件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐藤彰宣	4. 巻 72
2. 論文標題 「明日の教養」と「戦争の記憶」との接点 : 占領期以後における雑誌『丸』の変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 外大論叢	6. 最初と最後の頁 141-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 松永智子	4. 巻 72
2. 論文標題 島の暮らしと「移民」のメディア	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 道標	6. 最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森下達	4. 巻 52巻12号
2. 論文標題 ギャグマンガ的ナンセンスの再構築 『天才バカボンのパパなのだ』(一九七八年)における祝福と鎮魂	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ 詩と批評	6. 最初と最後の頁 270-280
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森下達	4. 巻 27
2. 論文標題 「疑似イヴェントSF」としての永井豪の初期ギャグマンガ作品 「マンガ世代」のマンガ作品における外部の喪失	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 マンガ研究	6. 最初と最後の頁 82-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水出幸輝	4. 巻 2
2. 論文標題 書評 『戦後日本、記憶の力学 「継承という断絶」と無難さの政治学』 福間良明著、作品社、2020年 (近刊)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館アジア・日本研究学術年報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本昭宏	4. 巻 52巻10号
2. 論文標題 幽霊と一輪車：映画による歴史叙述と反戦平和をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ 詩と批評	6. 最初と最後の頁 307-315
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本昭宏	4. 巻 52巻12号
2. 論文標題 方法としてのケロイドと「おにぎり」：別役実と原爆の問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ 詩と批評	6. 最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上義和	4. 巻 4巻
2. 論文標題 否定と両立する包摂へー知覧から市ヶ谷と九段に臨む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 91-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田至剛	4. 巻 15号
2. 論文標題 マイコンが惹起した「アメリカ」と「世界」の表象	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 追手門学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 59-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上義和	4. 巻 73-7
2. 論文標題 「フィクションの特攻文学」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文学界	6. 最初と最後の頁 38-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下達	4. 巻 26
2. 論文標題 「戦前・戦中期の『少年倶楽部』における孤児の物語 海外児童文学の受容から田河水泡「のらくろ」へ」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 マンガ研究	6. 最初と最後の頁 8-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷本奈穂	4. 巻 2020年3月臨時増刊号
2. 論文標題 「調査に見る美容整形の諸相」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 309-318
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 FUKUMA Yoshiaki	4. 巻 33
2. 論文標題 The Construction of Tokko; Memorial Sites in Chiran and the Politics of "Risk-Free" Memories	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Japan review : Journal of the International Research Center for Japanese Studies	6. 最初と最後の頁 247-270
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15055/00007272	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本昭宏	4. 巻 50(10)
2. 論文標題 「民衆・女性・マイノリティ：高畑勲の映画における戦後民主主義のイメージ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ユリイカ』	6. 最初と最後の頁 56-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野上元	4. 巻 93
2. 論文標題 「メディア研究・ジャーナリズム研究における質的研究法の現在」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『マス・コミュニケーション研究』	6. 最初と最後の頁 2-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24460/mscom.93.0_2	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森下達	4. 巻 25
2. 論文標題 「石ノ森章太郎作品におけるベトナム戦争 戦後児童マンガの変容を考える」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『マンガ研究』	6. 最初と最後の頁 33-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白戸健一郎	4. 巻 4
2. 論文標題 「資本主義と公共圏の接点-河兎珍『パブリック・リレーションズの歴史社会学』（岩波書店）を読む」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『京都メディア史研究年報』	6. 最初と最後の頁 182-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福間良明	4. 巻 16
2. 論文標題 ポピュラー・カルチャーにおける「継承」の過剰と脱歴史化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 フォーラム現代社会学	6. 最初と最後の頁 104-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下達	4. 巻 1
2. 論文標題 一九五〇年代末～七〇年代初頭のSFショート・ショート作品における核エネルギー表象	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 158-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 権 学俊	4. 巻 53-4
2. 論文標題 近代日本における身体の国民化と規律化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館産業社会論集	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高井昌史	4. 巻 51-1
2. 論文標題 旅や冒険を表象するテレビ番組と「真正性」「教養」：『川口浩探検シリーズ』と『すばらしい世界旅行』の比較研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 桃山学院大学 社会学論集	6. 最初と最後の頁 31-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本昭宏	4. 巻 2
2. 論文標題 核の「重さ」と「軽さ」：一九七〇年代論の手がかりとして『太陽を盗んだ男』を読み解く	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 新社会学研究	6. 最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 森下達
2. 発表標題 「劇画」からキャラクター消費へ 雑誌メディアにおける『愛と誠』（1973-76年）関連コンテンツをめぐって
3. 学会等名 創価大学社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 権学俊
2. 発表標題 「戦後日本保守政治家の歴史認識と日韓関係」
3. 学会等名 世明大学人文社会科学研究所特別講演（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 権学俊
2. 発表標題 「日韓両国における朝鮮人特攻隊員に関する認識と受容」
3. 学会等名 第22回社会文化学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 権学俊
2. 発表標題 「日本におけるダークツーリズムと地域活性化」
3. 学会等名 教育部・韓国学術財団主催 韓日中「国際学術シンポジウム」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下達
2. 発表標題 「被爆による奇形化とマンガ表現 石ノ森章太郎「サイボーグ009」の描き換えを軸として」
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前田至剛
2. 発表標題 「半導体戦争時代のマイコンと教養 昭和50年代のコンピュータ総合雑誌を事例として」
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日高勝之
2. 発表標題 Negotiating Sex, Bizarreness and Politics: February 26 Incident and Abe Sada on Films
3. 学会等名 International Conference 'Directions in Japanese Film Studies' (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福間良明
2. 発表標題 The Arguments on War Experience in postwar Japan and "criticism of victim mentality"
3. 学会等名 Conference:Challenge of Reconciliation Studies
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 権学俊
2. 発表標題 「日本社会における「戦跡」による街づくり」
3. 学会等名 地域創生主義「韓・日・中 国際学術シンポジウム」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下達
2. 発表標題 「「疑似イベントSF」としての永井豪作品 「ハレンチ学園」および1970年代半ばまでの『週刊少年マガジン』連載作品の検討」
3. 学会等名 日本マンガ学会第18回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日高勝之
2. 発表標題 「昭和と平成の間～モラトリアムから偶然性まで」
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会関西支部秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田至剛
2. 発表標題 「初期PC利用者のメディア文化再考 昭和50年代の日米のPC総合雑誌を事例として」
3. 学会等名 第91回日本社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sato Akinobu
2. 発表標題 "Close relation between sports criticism and non-fiction: the appearance of Number in 1980 's"
3. 学会等名 International Workshop Japanese Body Culture and Sport in Visual and Textual Representations (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 権 学俊
2. 発表標題 朝鮮人特攻隊員に対する日韓両国社会の認識と受容
3. 学会等名 教育部・韓国学術財団 国際シンポジウム(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yamamoto Akihiro
2. 発表標題 Nuclear Fear in Special Effects Programs on Japanese TV in the 1960s and 1970s
3. 学会等名 EAJS2017 Conference in Lisbon (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計18件

1. 著者名 福間良明	4. 発行年 2020年
2. 出版社 作品社	5. 総ページ数 333
3. 書名 『戦後日本、記憶の力学』	

1. 著者名 山本昭宏編 (福間良明、佐藤彰宣、野上元)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 312
3. 書名 『近頃なぜか岡本喜八: 反戦の技法、娯楽の思想』	

1. 著者名 永田大輔、松永伸太郎編 (森下達)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 267
3. 書名 『アニメの社会学 アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』	

1. 著者名 小林盾編（谷本奈穂）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版	5. 総ページ数 242
3. 書名 『嗜好品の社会学 統計とインタビューからのアプローチ』	

1. 著者名 坪井秀人（編）/野上元	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三人社	5. 総ページ数 603頁
3. 書名 『戦後日本文化再考』（野上元「再演される「東京裁判」 一九七〇/八〇年代の江藤淳と映画『東京裁判』」）	

1. 著者名 神野由紀・辻泉・飯田豊（編）/佐藤彰宣	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 372頁
3. 書名 趣味とジェンダー	

1. 著者名 小林盾・川端健嗣（編）/谷本奈穂・渡邊大輔	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 286頁
3. 書名 変貌する恋愛と結婚/担当：「ロマンティックラブ・イデオロギーとロマンティックマリッジ・イデオロギー：変容と誕生」	

1. 著者名 志村真幸、鈴木康史、武田悠希、熊谷昭宏、高嶋航、坂元正樹、高井昌吏、大野哲也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 せりか書房	5. 総ページ数 289
3. 書名 冒険と探検の近代日本 物語・メディア・再生産	

1. 著者名 谷本 奈穂	4. 発行年 2018年
2. 出版社 花伝社	5. 総ページ数 256
3. 書名 美容整形というコミュニケーション	

1. 著者名 藤田結子・成実弘至・辻泉・米沢泉・田中里尚・谷本奈穂・北村文・田中東子・渡辺明日香・工藤雅人・アシュリー・ミアーズ・狩野愛	4. 発行年 2017年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 296
3. 書名 『ファッションで社会学する』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	日高 勝之 (HIDAKA Katsuyuki) (00388787)	立命館大学・産業社会学部・教授 (34315)	
研究分担者	前田 至剛 (MAEDA Noritaka) (00454455)	追手門学院大学・社会学部・准教授 (34415)	

6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森下 達 (MORISHITA Hiroshi) (00775695)	創価大学・文学部・講師 (32690)	
研究分担者	井上 義和 (INOUE Yoshikazu) (10324592)	帝京大学・公私立大学の部局等・准教授 (32643)	
研究分担者	権 学俊 (KWON Hak Jun) (20381650)	立命館大学・産業社会学部・教授 (34315)	
研究分担者	高井 昌吏 (TAKAI Masashi) (20425101)	東洋大学・社会学部・教授 (32663)	
研究分担者	野上 元 (NOGAMI Gen) (50350187)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	白戸 智子 (松永智子) (MATSUNAGA Tomoko) (60735801)	東京経済大学・コミュニケーション学部・准教授 (32649)	
研究分担者	山本 昭宏 (YAMAMOTO Akihiro) (70644996)	神戸市外国語大学・外国語学部・准教授 (24501)	
研究分担者	佐藤 彰宣 (SATO AKinobu) (70804350)	東亜大学・人間科学部・講師 (35503)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	白戸 健一郎 (SHIRATO Kenichiro) (80737015)	筑波大学・人文社会系・助教 (12102)	
研究分担者	谷本 奈穂 (TANIMOTO Naho) (90351494)	関西大学・総合情報学部・教授 (34416)	
研究分担者	水出 幸輝 (MIZUIDE Kouki) (90882390)	京都大学・教育学研究科・特別研究員 (PD) (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関